

大乘

# DAIJO 法話

## 「私のことですから」



兵庫・善教寺副住職  
赤井 智頭

仏さまの教えは、今を生きている私自身が聞かせていただく大切な教えです。他のどなたかが代わりに聞いてくださるものでも、聞くことができるものでもありません。なぜなら、私の人生には代役や代理を立てることはできないからです。浄土真宗の教えも同じです。浄土真宗の教えは、自分の力ではどうすることもできないさまざまな苦悩を抱えて生きる、私の人生そのものの上に、阿弥陀さまのお心を聞き、味わわせていただくものに他なりません。

毎月行なっている自坊じぼうでの法要や勉強会に、かかさずお参りに来られる、七十歳を超えた一人のご門徒がおられます。バスと電車を乗り継ぎ、ご自宅から一時間以上かけての寺参り。お年を考えても並大抵のご苦勞ではありません。今から約十年前にご主人を亡くされたのをご縁として、このお方の聞法の日々が始まりました。はじめは浄土真宗の教えを聞いても、本を読んでもわからないことばかり。「阿弥陀さまってどんな仏さまなの…」「お念仏を称となえることにど

んな意味があるの…」。聞いても聞いてもわからないもどかしさに、ご主人を亡くされた悲しみの気持ちと相まって、心が折れそうになったことが何度もあったそうです。しかし、繰り返し繰り返しお聴聞され、仏法に触れていくうちに、深く身に染み入るものがあり、不思議と心のつかえが取れていかれたそうです。

以前、お盆参りで、お宅へ寄せていただいたことがありました。正信偈のおつとめをした後、お茶を飲みながら、自然とご法義話に花が咲きました。その中での会話です。

「いつもご遠方のところ、お寺にお参りくださってありがとうございます」

何気なく私がお礼を申し上げますと、  
「いえいえ、仏法は私のことですから」

とのお返事が返ってきたのです。このお言葉を聞き、私はご門徒のお領解りょうげに頭の下がる思いがしました。

親鸞聖人がつねづねおっしゃっていたお言葉として、「弥陀みだの五劫思惟ごこくしゆいの願がんをよくよく案ずれば、ひとへに親鸞いしんにん一人がためなりけり」(註釈版聖典853頁)とお言葉が、『歎異抄』に伝えられています。それは、阿弥陀さまの本願は、生きとし生けるすべての衆生しゆじやうを目当てとされているものですが、よくよく考えてみると、もっとも愚かで救われがたい、この私のためにおこされた願いでありましたと、聖人が讃さんじていかれたお言葉でした。

阿弥陀さまは仏さまと成られる前、法蔵菩薩ほうぞうぼさつと名のられていた時に、さまざまな苦しみや悲

しみを抱えて生きる私たち衆生の姿をご覧ください、必ず救い遂げてまことの安らぎとよろこびを恵み与えようという、大悲の誓願である本願をおこされました。そして本願を完成するために、途方もない長い時間をかけて修行を行い、ついにすべての者を救い遂げていく力を完成され、阿弥陀仏という仏さまに成られたと、『無量寿経』には説かれています。

阿弥陀さまの本願は、煩惱に惑い、「いのち」の行き先を知らない、迷いの私を救うためにおこされた大悲の願いでした。葉があつて病気ができたわけではありません。光るライトがあつて暗闇ができたわけでもありません。病を治すために葉が仕上がり、暗闇を照らすためにライトが完成していったのです。阿弥陀さまの本願



カット 長井多美栄

も同じでした。苦悩を抱えて生きる迷いの私が存在していたからこそ、大悲の本願がおこされたのです。この本願の救いが完成したことを、すべての衆生に告げ知らせる名告りが、「南無（まかせよ）阿弥陀仏（われに）」という名号でした。この名号こそ、煩惱という病に惑って生きる私の薬となり、「いのち」の行き先を知らずに生きる、私の人生の光となるものなのです。

「南無阿弥陀仏」の名号は、私を念仏申す者に育て上げ、必ず浄土へ迎えとって仏に仕上げてみせるという、阿弥陀さまの願いのはたらきそのものに他なりません。「南無阿弥陀仏」と、今ここに届けられている如来のみ名を聞きひらき、お浄土への人生を歩ませていただく時、私の「いのち」が、どれほど大きな願いの中に包

まれてあったのかを知らされます。まさに「親鸞一人がため」「仏法は私のこと」とおっしゃったゆえんです。

お話を終え、お見送りくださった玄関口でニコツと笑っておっしゃいました。

「亡き主人のおかげで、ようやくお念仏の教えに遇うことができました。きっと主人は私のことが心配だったんでしょうね。主人を亡くした悲しみや、日々の悩みは消えませんが、仏縁をいただいたことに対して、不思議と今では感謝の想いでいっぱいです。また来月のご法要を楽しみにしています」

セミが鳴き、容赦なく日差しが照りつける真夏の午後、私の心には涼やかな風が吹き抜けていました。